

学都・仙台の中心部に新キャンパス誕生 地元で活躍する同窓生の支援も得て 豊かな未来への歩みが始まる

郡和子

仙台市長

大西晴樹

学校法人東北学院院長
東北学院大学 学長

加藤義夫

株式会社サン・ベンディング東北代表取締役
TG地塩会会長



2022年9月、東北学院大学の五橋キャンパスが竣工する（開学は2023年4月）。学都・仙台の中心部に誕生する新キャンパスには、未来を担う人材の育成はもとより地域活性化の面からも、大きな期待が寄せられている。新たな交流拠点からどんな未来が創出されるのか。東北学院大学の卒業生でもある郡仙台市長、大西学長、同窓会組織TG地塩会加藤会長のお三方に、それぞれの立場から語り合っていた。



大西 晴樹(おおにし はるき)
学校法人東北学院 院長
東北学院大学 学長

して回遊通路で結ばれており、天候に左右されずに行き来することができます。それぞれの建物をつなぐことにより、学生同士のコミュニケーションの輪が広がり、より豊かなキャンパスライフを満喫することができると思います。

渡辺 素晴らしいキャンパスライフに期待がふくらみます。そのキャンパスの恩恵を私たち市民も享受することができるといいことですね。

郡 仙台には学都の歴史があり、生涯学習や社会活動に対する関心度が高いという市民性があります。市の中心部に学びの拠点となり得る場ができるというところに多くの市民が期待していると思います。

五橋キャンパスが開校する2023年は、世界最高水準の分析機能を有する次世代放射光施設の施設完成や、34年ぶりとなる全国都市緑化仙台フェアの開催など、本市にとっても大きな節目となる重要な年です。そうしたなか、学都仙台の都心部に約1万1千人の学生さんたちが集うキャンパスが誕生することとは、次なる飛躍への追い風になると期待しております。



郡 和子(こおり かずこ)
仙台市長

渡辺 まず最初に、東北学院大学（以下学院大）の新キャンパスについてご紹介ください。

大西 これまで土樋、多賀城、泉と3つに分かれていたキャンパスを土樋・五橋に統合し、アーバン（都市型）キャンパスとしてスタートします。五橋キャンパスは、ランドマークとなる地上16階建の高層棟「シュネーダー記念館」と多目的ホールや学生食堂等が入るホール棟「押川記念館」、講義棟、研究棟、4つの建物から成ります。大きな特徴は、地域に開かれたキャンパスということ。カフェや食堂、コンビニ、書店などは学外の皆さんにもご利用いただけますし、パイプオルガンを備えた千人収容の多目的ホールもコンサートやセミナー等の会場としてご利用いただけます。高層棟には「未来の扉センター」と名付けた地域連携の拠点を設け、地域に根を下



加藤 義夫(かとう よしお)
株式会社サン・ベンディング東北代表取締役
TG地塩会 会長

また、五橋キャンパスの開校に合わせて地域総合学部を新設する構想があると伺っております。学院大には創立時から「地域に奉仕して地域から信頼される人材



東北学院大学五橋キャンパスイメージパース



学生時代の思い出も交え、和やかに語り合う郡市長、大西学長、加藤会長。進行役を務めたのは、りらくアンバサダー渡辺祥子さん（左端）

ろした大学として、自治体や企業等との連携、社会貢献活動をより充実させていきます。

7階建の講義棟には全フロアにエスカレーターを設置し、講義室間の移動がスムーズにできるようにしています。また、4つの建物は2階部分がTGUリングと



「歩こう動こう脱メタボプロジェクト」において、コース内の神社で参拝する様子

を輩出する」という建学の精神があり、日頃の授業や課外活動でもフィールドワークなどを通じて学生さんと地域との素晴らしい連携体制が形成されています。今後、まちづくり、地域づくりにさらにご貢献いただけるものと感じており、大きな財産がまたひとつできることをとても嬉しく思います。

大西 2023年度の新設学部として、地域コミュニティ学科と政策デザイン学科を有する地域総合学部、情報学部データサイエンス学科、人間科学部心理行動科学科、国際学部国際教養学科の4学部5学科を構想中です(※)。いずれも、大きく変化する時代の要請、地域の課題に 대응することのできる人材を育む専門教育を行うものです。

私どもは、総合知の大学を目指しております。文系、理系の枠を超えた文理融合、専門知と教養知の結合、そして大学と地域の連携によって得られる実践知、これらを合わせた総合知を身につけられる大学です。キャンパスが新しくなるだけでなく、大学としても一歩前に踏み出す大きな変化の年になるだろうと思っております。

郡 人材を育てる新たな土台になると感じています。仙台が抱える長年の課題の一つに、学生さんたちが卒業後に働く場を求めて地域外に出ていってしまうということがあります。このコロナ禍で、仙台から

とともに、起業家育成の支援も行っていきたいと考えております。

渡辺 仙台市でも、若い方たちが活躍できる取り組みに入れていってほしいと思いますよ。

郡 昨年度スタートさせた基本計画の8つのチャレンジプロジェクトの1つ「地域協働プロジェクト」のなかで、若い方たちが仙台や自分の住む地域に関心を深め、地域の担い手としての力を発揮できるように機会をつくろうという取り組みを行っています。また、まちづくり活動の担い手となる若者の育成を目指した、「仙台まちづくり若者ラボ」という事業には、学院大の学生さんも参加してくださっています。昨年度、健康福祉局で実施した「歩こう動こう脱メタボプロジェクト事業」の一部には、若者ラボ参加者の方々の意見も取り入れられました。

このように若い力をたくさんいただきながら、仙台市の市政が動いています。各区役所でも学生さん同士のネットワークを構築したり、地域とのネットワークを構築したりと、さまざまな分野で活躍いただいています。

また、地元の若者が地域に定着し、活躍できるよう環境を整えることも重要です。現在、多くの学生さんが奨学金を受けて学んでおられますが、地元企業に就

東京都へ流出する人口が少し減り、また首都圏の企業が地方への移転に積極的になるなどの変化が現れてきています。有能な学生さんたちにこの地域に根づいてもらえるチャンスと捉え、働きたいと思えるような魅力的な企業の誘致などにも積極的に取り組んでいきたいと考えております。

渡辺 卒業生が活躍できる場の創出という意味では、東北学院同窓生の起業家、経営者の方たちがつづられている同窓会組織、TG地塩会の役割が重要になってくると思うのですが。

加藤 TG地塩会は、2003年に同窓生のなかの企業経営者有志が母校への恩返しと地元経済活性化のために立ち上げました。名称の「地塩(ちのしお)」は、東北学院の建学の精神である聖書の言葉「地の塩 世の光」からいただいたものです。登録数は130名を超え、常時90名前後の会員が年3回の会合に参加しています。

仙台は支店経済のまちで、地元企業の経営者にとっては厳しい状況にあります。そのなかで踏ん張っている経営者同士、東北学院の同窓生という絆のもとに切磋琢磨していこうと、講演会を開いて学んだり、さまざまな課題について話し合ったりしています。もちろん、地元への貢献、母校への支援も大事な活動になっております。地域の活性化のためには、まずは自分た

職した学生の奨学金返還を就職先企業と行政が協力して支援するという取り組みも行っています。これまで3年間で300名近くの学生に制度を利用いただいております。地元定着の促進につながっていると感じています。

加藤 私は、自分が約半世紀前に脱サラで会社を起したこともあり、起業を志す若者を応援したいと思っております。

残念ながら日本における起業率は、欧米諸国の半分ほどで、世界でも下位な水準です。日本の若者はどうも保守的な傾向があるようです。

東北学院同窓生の企業経営者数は東北一であり、2代目3代目の社長も多く、地方の学校では珍しいことですが上場企業の経営者も10人ほどいる。学院大にはせっかく経営学部があるので、どんどん起業家が育ってほしいものです。

郡 仙台市は2020(令和2)年に国のスタートアップ・エコシステム拠点都市に選定されており、革新性をもって急成長を目指すスタートアップ企業の支援に積極的に取り組んでいます。多様な働き方の選択肢として学生や若者、女性の起業への関心が高まっておりますので、加藤会長にも、ご自身の経験も踏まえたうえで、若い方たちをご指導いただけたらいいと思います。



「若者ラボ」第1回ワークショップ、TOHOKU360編集長安藤歩美氏による講義「東北ニュースクール講座 地域の魅力・課題の見つけ方」

ちがしっかりとした経営を行い、納税し、従業員への賃金を払い、学生さんたちに応募してもらえて、それを受け入れられる企業であり続けることが基本。

弊社では社員の6パーセントが東北学院の卒業生です。学院の卒業生は面白いんですよ。発想が自由で、人柄が真つすくで、会社ではとても力になっていきます。そうした人材は、起業家としても力を発揮できると思うので、先達として良いお手本になる

※学部学科名称はいずれも仮称。計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。



若者版・市民協働事業提案制度で、青葉区立町エリアにおける地域コミュニティの形成を目的に活動する団体が、酒のかわしまのイベントスペース「kichikichi」でお茶会(たちまち茶々)を開催

大西 先ほど加藤会長が学院大卒業生の人間性を誉めてくださいましたが、それはキリスト教人格教育の賜物だと思っております。地塩会の名称の元にもなっております。地の塩は、聖書が意味している塩の解釈ですが、塩というのは素材の味を引き立たせる調味料でもあります。経営者は、いろいろな人材のいいところを引



き出して活用し業を成していくという仕事です。自ら塩となつて人の持ち味を引き出すことができるのは、東北学院の卒業生たちの素晴らしいところだと思います。

渡辺 最後に、学院大に期待すること、今後どのように貢献していきたいか、お聞かせください。

加藤 やはり企業と行政、そして大学が一体化していくのが一番面白いかなちになるのではないかと思います。ベンチャー企業の創出を通して起業家を育成する試みを行っている大学がありますが、そうした育成に向けての取り組みに、ぜひ私も経営者を活用していただきたいものです。行政の取り組みに対してもですが、企業として、経営者として、できるかぎり応援したいと思っております。

郡 学院大のスクールモットーである「LIFE（命・生命の大切さ・個人の尊厳）LIGHT（光・知識・希望）LOVE（愛・隣人愛）」という3L精神が教育の中でしっかりと息づいており、学生は地域に貢献する人材へと育っています。地域との関わりを軸に今後も人材育成に力を注いでいただけたらと思います。20万人に近い卒業生が東北を中心に全国で活躍している背景には、同窓会で

の仲間とのつながりが大きな力になっていると感じておりますので、地域経済を牽引している地塩会の方々には、ぜひ若い人たちを引っ張っていただきたいと思っています。また、新たな五橋キャンパスには、開かれた学舎として市民の皆さまが社会貢献に役立つ自分づくりをするためのさまざまな学びの場になることを期待しております。

大西 学生は、自分が将来大人、社会人としてどう生きていくかということを決えず思い描きながら、ときには迷いつつも成長していきます。それは学生の特色でもあり、青春というものだと私は考えております。その場合に、一番想定しやすいロールモデルが卒業生の皆さんです。卒業生の活躍は本当に心強いものであり、現役学生を励まします。学校の真価、ブランド力というのは、どのような卒業生を輩出しているかによるといっても過言ではないと思っております。東北学院大学は、地域社会においてブランド力の高い大学であります。これは、136年の歴史と多くの卒業生の活躍による成果であると思います。知識だけでなく、キリスト教の人格教育によって、自分のことばかりでなく周囲のことも気遣えるジェントルマン・ジェントルウーマンの卒業生たち、とりわけ地塩会の卒業生の活躍に期待している次第です。

